

## 第五章 「読むこと」の指導

### 一 読む力

人間は五感を通じた体験を積み重ねることで自分を取り巻く世界を理解していく。その一方で、我々は言葉、特に他者の言葉を通じて世界をより深く理解していく。

経験や知識、価値観といったものが完全に同じ人間は存在しない。そうしたものが異なると、同じ対象を前にしても、そこから受ける印象が異なってくる。つまり、他者は自分とは異なる視点で世界を見ており、それに基づいた他者の言葉は、その人にだけ見えている世界の一面を表現しているのである。だから、他者の言葉に触れることは、自分がまだ体験したことがない世界の新しい一面に触れることを意味する。そうした言葉を通じた新しい体験が積み重なると、自分を取り巻く世界への理解、より具体的に言えば、人間、社会、自然などに対する見方、感じ方、考え方がより深まっていく。

さらに、五感を通じた直接的な体験とは異なり、人間は文字を用いることで、過去に存在した人間が感じたこと、考えたことに触れることができる。古文や漢文を読む醍醐味は正にこの点であろう。この章で取り上げる「読むこと」とは、要するに、文字という媒体を通じて、自分を取り巻く世界への理解を深める行為を指す。そして、「読む力」とは、文章などを読むことによって書き手の意図を的確に捉え、自分の考えを豊かにすることを指す。

なお、先に述べたように、「読むこと」のおもしろさの一つは、

時間や空間を超えて、他者の視点に立つことができる点にある。よって、「読むこと」の指導を進めるに当たっては、現代文と古典の双方が同等に重要であることは言うまでもない。学習指導要領の「読むこと」に関する「内容の取扱い」においては、「古典を教材とした授業時数と近代以降の文章を教材とした授業時数との割合は、おおむね同等とすることを目安として、生徒の実態に応じて適切に定めること。なお、古典における古文と漢文との割合は、一方に偏らないようにすること」と定めている。また、「読むこと」の学習が単なる黙読や教室内だけの行為にとどまることがないように、「文章を読み深めるため、音読、朗読、暗唱などを取り入れること」「自分の読書生活を振り返り、読書の幅を広げ、読書の習慣を養うこと」とも記している。

### 二 「読むこと」の指導

共通必修科目の「国語総合」においては、「読むこと」の指導事項として、次の五点が挙げられている。

- ア 文章の内容や形態に応じた表現の特色に注意して読むこと。
- イ 文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約や詳述をしたりすること。
- ウ 文章に描かれた人物、情景、心情などを表現に即して読み味わうこと。

エ 文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図をとらえたりすること。

オ 幅広く本や文章を読み、情報を得て用いたり、ものの見方、感じ方、考え方を豊かにしたりすること。

また、「現代文B」「古典B」は、「読むこと」を指導の中心とする選択科目である。

### 三 言語活動例

二の指導事項については、例えば次のような言語活動を通して指導する。

ア 文章を読んで脚本にしたり、古典を現代の物語に書き換へたりすること。

・『宇治拾遺物語』の「児のそら寝」を会話部分だけではなく、地の文も含めて脚本化し、書き手や文章中の人物の考え、感情をより深く捉える。

イ 文字、音声、画像などのメディアによって表現された情報を、課題に応じて読み取り、取捨選択してまとめること。

・『伊勢物語』の「芥川」の異なる挿絵を集め、作品の解釈の違いを比較する。

ウ 現代の社会生活で必要とされている実用的な文章を読んで内容を理解し、自分の考えをもって話し合うこと。

・同じ題材を扱った社説やコラムを読み比べ、グループの中で考えを発表し合う。

エ 様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。

・「羅生門」と『今昔物語集』中の話とを比較し、異なる点や作者の意図の違いなどを話し合う。

### 四 指導の際の留意点

#### (一) 論理的な文章

ア 論理的な文章を学ぶ意義

論説、評論といった論理的な文章は、ある対象（人間、自然、社会、文化など）について、筆者が自分の意見や主張を述べた文章である。このような文章を読む際の目標は三つある。一つ目は、文章の展開を丹念にたどって筆者の主張を理解することである。二つ目は、筆者がどのように考えを進めて結論に至っているか、すなわち筆者の文章の構成を理解することである。そして三つ目は、筆者の主張に対して自分ならどう考えるかという自分独自の

意見を考えることである。この三つの目標に基づいて文章を読解することは、生徒の論理的思考力を高めるばかりでなく、生徒が自分の考えを論理的に表現する能力を高めることにもつながっていく。また、優れた論説や評論を読むことで、ものの見方や感じ方、考え方が広がり、深まることにもつながる。

#### イ 論理的な文章の指導法

##### (ア) 読解の基礎

論理的な文章を学習する基本は、文章の展開を丹念にたどって論旨を読み取り、筆者の主張を的確に把握することである。そのためには、まず語句の意味を正しく捉え、接続詞の働きを理解するといった読解のための基礎を習得させる必要がある。

##### (イ) 読解の進め方

論理的な文章ではキーワードやキーセンテンスに気を付けて、本文に傍線を引きながら読むことが理解につながる。また、対比表現や接続詞をチェックして、文や段落相互の関係を考えながら読み進めさせることも重要である。さらに、その論の展開において、どのような具体例から抽象化が行われているかという、具体

と抽象に注目させることによって、筆者の主張を的確に読み取らせることができる。

##### (ウ) 読解を深める

読解が進んでからは、論の展開を図示したり、表にまとめたりして、より明確に文章の構成を理解させるとよい。また、要約文などを作成して、主題への理解を深めさせることもできる。そして、筆者の主張を理解し、自分の問題として発展させていくためには、理解した内容を自分の言葉で表現させることが効果的である。身近な話題や体験、また時事問題などから取材し、表現の工夫や論の展開方法をまねて作文や小論文を書かせたり、デイベートを行ったりして考えを深めさせることができれば、読解によって筆者から学んだ視点を自らの思考の中に取り入れていくことができる。さらには、筆者の論理の展開やその根拠となる箇所疑問がないか、筆者の主張に対して自分はどう考えるかという批評をさせることで、生徒の論理的思考力、表現力をより高めることができる。そして、そのような批評を行う際には、同じ対象について異なる主張を展開している文章を複数参照させるという学習活動が効果的である。

#### コラム⑨【読書指導】

生徒への読書指導は難しく、楽しく、恐ろしい。読書指導と聞いていつも思い出すのは、モームの回想的エッセイである。以下は岩波文庫『サミング・アップ』の二十五章からの抜粋。筆者が青年時代の読書について記した一節である。

「私は実に勤勉な青年だった。(中略)多くの歴史書、少しの哲学書、たくさんの科学書を読んだ。あまりに好奇心が強いものだから、読んだものについてじっくり考える余裕がまるでなかった。一冊読み終わると、次の本を直ぐに読みたくて堪らなかつたのだ。これ

はいつでも胸躍る経験だった。」

このあたりを讀んでいると、ああ、そうだよなあ、こういう体験を生徒にもぜひしてほしいなあと素直に思う。続けて、「私の場合が読書が休息である。(中略)短い間でも読書が出来ないと、薬の切れた中毒患者のように苛々してくる。」

このあたりもまだよい。読書への熱意、大いに結構と余裕がもてる。しかし、「読み物がないと、時間表とかカタログを讀む。これは控え目な言い方だ。私は陸海軍ストアの値段表、古書店の目録、鉄道時刻表などを讀み耽つて楽しい時間を過ごしたことがある。いずれもどこかロマンスの雰囲気があつて、最近の小説のいくつかなどよりはるかに面白いと思う。」

このあたりまで来ると不安な気持ちがわいてくる。自分はそこまで「読書」を楽しんでいるだろうか。そしてこの章の最後の一文。「初めから終わりまで讀まなかった本は、数えてみると十冊以下である。その一方、二度讀んだ本はほとんどない。一度讀んだだけでは全てを味わえない書物がたくさんあるのは知っているが、一度讀んだときに吸収できるものは全て吸収したのであり、それこそが、たとえ細部は忘れても永遠の財産として自分に残るのだ。世の中には同じ本を繰り返し讀む人もいる。こういう連中は目で讀むに過ぎないのであつて、感性は用いているはずがない。むしろ、無害な作業であるが、知的な作業だと思つるのは誤解というものである。」

ここまで讀むと考え込んでしまう。生徒の読書体験は個人差が大変大きい。ある生徒にとつておもしろかつた本が、他の生徒にとつてもおもしろいものであるとは限らない。その意味において、読書指導は難しい。しかし、自分が薦めた本を生徒が讀んでくれるというのは、国語の教師としての大きな喜びである。その意味において読書指導は楽しい。しかし、もし自分よりもはるかに本を讀んでいる生徒がいたら、自分よりもはるかに深い讀みをしている生徒がいたら、教師としてどんな本を薦めればよいのだろうか。もちろん何も薦めず、本人の心のおもむくままに読書をしてもらえばよいのだろうか。しかし、続けてすぐ、「このような読書の仕方をしてる生徒に、どのような国語の授業をすればよいのだろうか。」という疑問にぶつかると。放っておくわけにもいかない。しかし、二度讀むのは「知的な作業」ではないと感じている生徒に一体何を「指導」できるのだろうか。もちろんモームの生きた時代と現代とは、青年を取り巻く環境は大きく異なる。彼のような読書体験をしている高校生はまずいない……いや、しかし、もしかしたら……読書指導と聞くと私はいつもこのことを考えてしまう。その意味において読書指導は恐ろしい。

◆参考資料◆ サマセット・モーム『サミング・アップ』岩波文庫 二〇〇七年

## コラム⑩【板書のコツ】

「生徒が力をつけることができる授業」これは、私たち教員にとっての大きな課題であり、教員生活を送っている間は絶え間なく、そのための教材研究や授業計画、言語活動や発問の検討、そして板書計画などを日々行っていくことになる。しかし、その一方で板書自体をどのように行っていけばいいのかは、あまり意識されないように感じる。ここでは板書のコツについて、考えてみたい。

### ①チョークの持ち方

筆圧をかけてしっかりした文字を書きたいときには、親指、人差し指、中指でチョークの先を持つようにするとよい。また、手首に力が入ると、しようやはらいを出しにくいので、手首に力を入れて曲げることがないようにしたい。

### ②板書するときの姿勢

黒板に対して正面を向いて書くと、板書はしやすいが、声が通りにくく（板書しながらの発声は避けた方が望ましいが）、何よりも生徒の様子が把握できない。よって、正面を向いた状態から片足を少し下げ、半身に構えるのが書きやすく、生徒の様子もよく分かるとよい。

### ③色使い

チョークの色の種類が多くなりすぎると、板書が複雑になってしまいよくない。多色を用いる場合も三、四色ほどに抑え、色の種類も生徒が見やすいものを使うとよい。また、色使いについては、その場の思いつきで色を変えることのないようにしたい。使い分けのルールを用いることで、生徒は安心して授業を受けることができるだろう。

### ④記号の工夫

色と同様、記号についても使い分けのルールを決めて工夫して用いるようにしたい。具体的には、囲みや傍線等の種類を分けることにより、説明がなくなるともそれが何を表しているか生徒が理解できるようにしておく、授業をスムーズに進めることができる。

- 一日時 平成\*年\*月\*日（\*曜日）第\*時間目（50分）
- 二 学 級 第一学年\*組（\*名）
- 三 単元名 論理的な文章の構成を把握しよう
- 四 単元の目標
  - （1）文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図を捉えたりしようとする。（関心・意欲・態度）
  - （2）文章の構成や展開を確かめ、内容や表現の仕方について評価したり、書き手の意図を捉えたりする。（読む能力）（「C読むこと」(1)のエ）
  - （3）文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにする。（知識・理解）（「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」(1)のイの(イ)）
- 五 取り上げる言語活動と教材

- （1）言語活動
 

様々な文章を読み比べ、内容や表現の仕方について、感想を述べたり批評する文章を書いたりすること。（C「読むこと」(2)のエ）
- （2）教材 山崎正和「水の東西」〔『国語総合』\*＊出版〕、町田健「言語の有限性と無限性」〔『新しい国語3』東京書籍〕
- 六 単元の具体的な評価規準
  - （1）文章の組み立て等の構成と、考えの進め方や内容の推移等の展開を確かめたり、書き手の意図を捉えたりしようとしている。（関心・意欲・態度）
  - （2）文章の組み立て等の構成と、考えの進め方や内容の推移等の展開を確かめたり、書き手の意図を捉えたりしている。（読む能力）
  - （3）段落の組み立て、語句の意味、用法などを理解し、語彙を豊かにしている。（知識・理解）
- 七 指導観
  - （1）単元観
 

二項対立という方法を理解することによって、論理的な文章の展開を学ぶことができる。
  - （2）学習者観
 

落ち着いて真面目に学習に取り組むことができるが、主体的に学ぶ姿勢に欠ける。評論の基本的な展開方法を学ぶことで、評論を読む面白さ、ものを考えることの楽しさに気付かせたい。
  - （3）教材観
 

東西の水の比較から出発し、それぞれの精神文化論に発展する評論の定番教材である。対比が明確な文章の読解を通して、二項対立という評論の基本的構成を理解させることができる。
- 八 単元の指導計画（配当時間4時間）

| 次<br>時間    | 学 習 活 動   | 留意点  | ◆評価規準、◆評価方法、<br>*努力を要する状況と評価した<br>生徒への支援の手だて  |
|------------|---|--|---|
| 第1次<br>1時間 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「言語の有限性と無限性」と「水の東西」を各自で通読する。</li> <li>・ワークシートIを用い、それぞれの文章で対比させられている内容を二つの項目に分類する。</li> <li>・ペアで分類した内容を確認する。</li> <li>・ワークシートIを用い、二項対立の効果について</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・読みながら、難解な語句や表現に印をつけさせ、後から辞書等で確認させる。</li> <li>・何と何が対比されているのか、大まかに把握させる。</li> <li>・特徴的な表現を抜き出させる。</li> <li>・対比された項目が文中のどこにあるかを確認させる。</li> <li>・自分の主張をより明確にする技法として、二項対立が</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>◇（3）                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◆「記述の点検」（ノート）</li> <li>*読めない漢字や意味が分からない語句をチェックさせ、辞書で調べさせたり、解説したりする。</li> </ul> </li> <li>◇（2）                             <ul style="list-style-type: none"> <li>◆「記述の確認」（ワークシートI）</li> <li>*ペアの助言をもらいながら</li> </ul> </li> </ul> |

資料3

十二 御高評

|                     |  |   |   |
|---------------------|--|---|---|
| <p>終結<br/>(5分)</p>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・本時の内容を振り返る。</li> <li>・次時の内容を知る。</li> </ul> | <p>④</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい単元に入ることを確認する。</li> </ul>    | <p>◆ワークシートⅢを回収し、「記述の分析」により評価する。</p>   |
| <p>展開<br/>(40分)</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・二項対立の役割を確認する。</li> </ul>                   | <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートⅢに再度筆者の主張をまとめ</li> </ul> | <p>③</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・二項対立は単に二つの内容を並べたものではなく、筆者の主張をより明確にするための技法であることを理解させる。</li> </ul> |
| <p>導入<br/>(5分)</p>  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・本日の学習内容を</li> </ul>                        | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・単元の目標と言語活動について確認する。</li> </ul> | <p>①</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・二項対立の役割について考えさせる。</li> </ul>                                     |
| <p>学習段階</p>         | <p>学習内容</p>  | <p>学習活動</p>   | <p>言語活動における指導上の留意点</p>  |

|                    |  |   |   |
|--------------------|--|---|---|
| <p>第3次<br/>1時間</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートⅢに「水の東西」における筆者の主張をまとめる。</li> <li>・相互評価表を用いて互いのまとめを確認する。</li> <li>・ワークシートⅢに再度筆者の主張をまとめる。</li> </ul>                       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・二項対立は単に二つの内容を並べたものではなく、筆者の主張をより明確にするための方法であることを理解させる。</li> </ul>  | <p>◇(2) ◇(1)</p> <p>◆「記述の分析」(ワークシートⅢ)</p> <p>*回収したワークシートの記述が不十分なものについては、再度説明したり、詳細なコメントを書いたりする。</p>                                     |
| <p>第2次<br/>2時間</p> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「鹿おどし」と「噴水」のそれぞれの特徴や印象をノートにまとめる。</li> <li>・日本人の感性の特徴を西洋との比較で捉え、ノートにまとめる。</li> <li>・ワークシートⅡを用い「水の東西」の構成を確認し、ペアで話し合う。</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・「東」と「西」の対比に注目させる。</li> <li>・接続詞や指示語に注目させる。</li> <li>・二項対立という視点から段落の構成を把握させる。</li> <li>・小見出しを付けることで再度本文の内容を確認させる。</li> </ul> | <p>ワークシートを完成させる。</p> <p>◇(2)</p> <p>◆「記述の確認」(ワークシートⅡ)</p> <p>*接続詞や指示語に注目させ、鹿おどしと噴水のそれぞれの特徴を整理させる。</p> <p>*ペアの助言をもらいながらワークシートを完成させる。</p> |
|                    | <p>考え、ペアで話し合う。</p>   | <p>あることに気付かせる。</p>  |   |

九 本時の目標

文章の組み立て等の構成に注目し、考えの進め方や内容の推移等の展開を確かめる。(読む能力)

十 本時の評価規準

文章の構成に基づいて筆者の主張を理解している。(読む能力)

十一 本時(全4時間中の4時間目)の指導

一、「言語の有限性と無限性」で対比されている内容を抜き出して、左の表の「言語」と「映像」のどちらかに分類しなさい。

| 言語                                      | 映像                                    |
|---|---------------------------------------|
| 例 事柄を曖昧に表す。<br><br><br><br><br><br><br> | 例 具体性がある。<br><br><br><br><br><br><br> |

二、「水の東西」で対比されている内容を抜き出して、左の表の「東」と「西」のどちらかに分類しなさい。

| 東                                  | 西                                |
|------------------------------------|----------------------------------|
| 例 鹿おどし<br><br><br><br><br><br><br> | 例 噴水<br><br><br><br><br><br><br> |

「論理的な文章の構成を把握しよう」ワークシートⅡ 組 番氏名

一、「水の東西」の内容を「起・承・転・結」の四段落に分割し、各段落の冒頭部分を書きなさい。

| 結 | 転 | 承 | 起 |
|---|---|---|---|
|   |   |   |   |

二、「起・承・転・結」の内容をそれぞれ簡単にまとめ、小見出しをつけなさい。

| 結 | 転 | 承 | 起 |
|---|---|---|---|
|   |   |   |   |

三、「水の東西」で作者がもつとも言いたかったこと（作者の主張）を本文中から抜き出しなさい。

|  |
|--|
|  |
|--|

四、作者の主張を裏付けているもの（根拠）を本文中の言葉を使って箇条書きにしなさい。

|   |
|---|
| 4 |
| 3 |
| 2 |
| 1 |

資料3

